感染症は文化芸術にも影を落とす
公会堂ゆかりの辰野金吾も犠牲に

全世界を覆う新型コロナウイルス感染症の流行のため、パンデミックが収束した後、人間の生き方や政治経済、社会、文化の価値観も大きく変化せざるを得ない。『いちょう並木』が情報提供してきた生涯学習のあり方も変わることだろう。しかし、年齢を問わず学びたいという意欲が衰えることはなく、生涯学習の重要性が失われることはない。

文化芸術面では、美術館、博物館や劇場、ホールの休館で、本物のアート作品や芸能、演劇、映画、音楽に触れることができないことに精神的な辛さを感じた方も多いと思う。一方でこの先、パンデミックをテーマに様々な作品が生み出されて行くに違いない。

感染症が文化芸術にどんな影響を与えたかを歴史に知ることも意義がある。たとえば100年前の大正7・8(1918・19)年を中心に大正10(1921)年頃まで流行したインフルエンザ「スペイン風邪」である。当時は「流行性感冒」と呼ばれ、米国が発生源とされる。スペイン風邪という名の由来は、流行の開始が第1次世界大戦末期で、交戦国のイギリス、フランス、ドイツ、アメリカが情報統制されていたのに比べ、中立国スペインの惨禍が報道されやすかったことによる。

世界中で5億人が感染し、死者は1,700万人から5,000万人と推計され(1億近いとの説も)、日本でも2,380万人が罹患し、39万人近くが命を失った。病死した著名人には、海外では詩人のアポリネール、昨年大阪でも展覧会が開かれた画家のクリムトや、エゴン・シーレが含まれ、日本では洋画家の村山槐多(かいた)や劇作家の島村抱月(ほうげつ)が没した。

大阪ゆかりでは、明治36(1903)年、中之島に日本銀行大阪支店、明治40(1907)年に浜寺公園駅を設計した東京帝国大学の建築家・辰野金吾(1854~1919)もいる。辰野は、大阪市中央公会堂の設計コンペを審査し、建築家・岡田信一郎の原案に基づき建築家・片岡安(やすし)と実施設計を行った。

公会堂のオープンは大正7(1918)年11月17日。翌大正8(1919)年、辰野は国会議事堂設計コンペの審査員をつとめる。しかし、スペイン風邪で肺炎をおこして同年3月25日に死去した。享年64歳。公会堂開館から半年もたっていない。華やかで今も中之島に時代の香気を漂わせる大阪市中央公会堂だが、開館の時代はスペイン風邪の流行期と重なる。功労者の辰野が開館半年後に没したことは秘められた逸話である。

大阪でもスペイン風邪は猛威を振るい、大正7、8年で府内の患者数47万人、死者1万1,000人だったという。一心寺(天王寺区)には、「大正八九年流行感冒病死者群霊」と刻まれた供養塔が、大正11(1922)年、女性教育にも尽力した道修町の薬種商人小西久兵衛と妻の吉栄によって建てられている。

「大正八九年流行感冒病死者群霊」供養塔(一心寺)

この大正7(1918)年は、大戦後の経済情勢の変化や「米騒動」に対応すべく、大阪市が日本最初の公設市場を開いた年でもある。推進したのは後に名市長となる助役当時の関一(せきはじめ)。市民のための施策を進めていった。

ちなみに今月号の表紙は、昭和3(1928)年1月の大阪市立衛生試験所内の家事衛生研究会発行『家事と衛生』新年号である(現・地方独立行政法人 大阪健康安全基盤研究所)。絵はがきや封筒、便せんで知られる高橋春佳がデザインしたアールデコ風のモダンガールが洒落ている。家庭の医学や衛生の知識、調理・洗濯の科学、結核やチフスなど細菌の情報をはじめ、この号では衛生試験所主催で北浜の三越で開かれた「日常生活と微生物の展覧会」の内容も紹介されている。

筆者プロフィール

橋爪 節也　はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葭堂―なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の現像―』(創元社)など。